

山羊農場における寄生虫症低減に向けた取組：伊那

家保 杉本和也

近年、除草や乳の利用等のために山羊の有用性を見直す動きがあり、県内および当所管内では飼養戸数及び頭数が徐々に増加。一方、山羊は寄生虫による被害がしばしば問題となる。平成28年7月、管内山羊飼養農場で死亡した子山羊の病性鑑定を実施。肝臓の多発性巣状壊死、腸間膜リンパ節の腫大とともに重度のコクシジウム寄生を確認。同居山羊からも多量のコクシジウムオーシストを検出。トルトラズリル製剤および生菌剤の投与を指示。その後、3件の死亡事例があったが、コクシジウムの検出程度は改善。しかし、5例目の死亡事例において捻転胃虫の重度感染が認められた。同居山羊の調査から農場での蔓延を危惧。線虫駆虫薬の種類・投与方法の変更を指示。1ヵ月後、再検査を実施し、捻転胃虫卵の減少を認めた。以上から、山羊の寄生虫対策には様々な寄生虫の感染を想定した投薬プログラムの検討が必要と考察。併せて畜舎の構造・飼料内容等、飼養衛生環境の改善を実施予定。